

目をつむったとき、思い出されるのは、家族と、仲間と、初めて見た景色、初めて知った感情、初めて心が動かされた瞬間。どうでもいいことで笑って、些細なことで喧嘩して、楽しすぎて疲れる。この時間がずっと続けばいいのと思う記憶たち。でも、そんな記憶ばかりではない。どうしようもなく、恥ずかしい記憶や、どうしようもなく、不安で怖い記憶がある。できることなら、思い出せないようにしたい。でも、それは正解なのだろうか。そのヒントをこの本は教えてくれた。

「ぼくの記憶は三十分しか持たない。」この本に出てくる。博士は、交通事故の影響で、一九七五年で記憶の蓄積が終わっており、それ以降、頭の中に八十分のビデオテープが一本しかセットできない状態だ。そこに重ね録りしていくと、以前の記憶を忘れてしまうのだ。なんて残酷なのだろう。この本を読んで初めにこう思った。楽しい、嬉しいだけでなく、悲しい、悔しいと言う感情も八十分後には忘れてしまうのだ。

もし、自分だったらどうだろう。その八十分を毎回懸命に生きることができたらどうか。多分できないと思う。だって、大切な人との大切な記憶が八十分後になくなると思うと、諦めた方が楽だから。八十分しか記憶が持たないことに悲しまないで済むから。でも博士は違った。大切な人とのその一瞬がなかったことにならないように、数学を通して彼なりのやり方で八十分を懸命に生きた。

私は今までの生活を振り返ってみた。博士のように八十分しか記憶が持たないわけでも、数学が得意なわけでもない。でも、共通点の一つ挙げるならば、同じ人間と言うこと。

この本を読んで後悔をたくさんした。なぜ私は時間を永遠だと思ったりしたのだろうか。そしてその時間をなぜ、大切な人のために使わなかったのだろうか。考えだしたらキリがない。でも、今気づけたのはすごいことなのではないかと思う。なぜなら、「大人」と呼ばれる人たちにも、まだ気づいていない人がたくさんいるから。一人では怖いからといって、たくさん人の未来を奪ってまで自分のためだけに明日を迎えない人。忙しいからといって、周りの暖かさも知らずに壊れていってしまう人。きっと彼らはまだわからなかったのだろう。大切な人と過ごす時間は生きることと同じ位の価値があること。だから私は、今回のこの後悔を二度とすることがないように、時間を大切に使っていきたい。

また、この本では最初と最後に伝えたいことが変化していくのを感じられた。最初は博士、家政婦の「私」と、その息子「ルート」が中心となって描かれていた。だが、後半「私」が博士の家政婦をクビになったところから、どれだけ丁寧に接してくれていたか、どんなことを教えてくれたかなど、多くが受け身で描かれているのだ。ある人の言葉を借りて、簡単に言うと、「愛した記憶」から「愛された記憶」へと変化していくのだ。

私は妙に納得した。きつと経験したことがあったからだ。初めての部活。これから「相方」とも呼べることあったとき、私はもつとこの子を知りたいと思った。同じ時間を過ごしていく中で、仲良くなれないかもしれないと思ったこともあった。いつも話しかけるのは私からの方が多かった。けれど、いつからか、その子から話しかけてくれることが増えていった。この変化を「愛」と置き換えるのは少し違うかもしれないが、「愛した記憶」から「愛された記憶」へと変わった瞬間だと思った。

「愛した記憶」から「愛された記憶」を理解した。今昨日よりも成長した気がする。成長と呼ぶには少し小さすぎるかもしれないが、

間違いなく考え方は広がった。だからそこに自信を持って、これからは過ごしていきたい。

博士は、「私」やルートとの出会いを通して、今までとは、また違った生き方を見つけたに違いない。

人間に記憶を与えたのは、たくさんの理由があると思う。でも私はその理由を説明するならば、大切な人との時間を忘れないように、「愛した記憶」と「愛された記憶」を思い出せるようにだと思う。

科学的な根拠もなければ、証明することも難しいけれど、自信を持って私は伝えたい。

いつか人を忘れる。授業で使う教科書を忘れてしまうように、一昨日食べた夕食を忘れてしまうように、忘れたくない記憶が、大切な記憶が思い出せなくなってしまう時が来るかもしれない。その記憶がなくなる位だったら、忘れたい記憶を全てなくしてしまいたい、と思うかもしれない。でも私はこの本を読んで、忘れたい記憶があるからこそ、忘れたくない記憶が生きるのだ、と学んだ。過去に怯えず、フィルムが切れてしまう。その時まで、すべての記憶を大切にしていきたい。